

# 民俗文化資料の デジタルアーカイブ化の試み

## 文化資源化と研究分野の更新に向けて

Attempts at Digitally Archiving Folk Culture Resources : To Make Use of  
Cultural Resources and Update the Field of Science

川村清志

KAWAMURA Kiyoshi

はじめに

① 民俗資料としての位置づけ

② 尾形栄一日記の概要

③ 資料化の過程

④ 民俗文化の分類項目の内包と外延

おわりに

### 【論文要旨】

本論は、日記資料のデジタルアーカイブ化の手続きにおいて生じた課題と、そこで醸成された民俗学の外延の拡張と更新の可能性について論じる。本論の最終的な目的は、大きく二つに分けることができる。一つは、特定の学問分野（ここでは民俗学）が扱う資料を一般化することで共有度を高め、関心を異にする民俗研究者はもちろん、他分野の研究者や一次資料に関心をもつ一般の人びとにも利用可能な形態を構築することである。もう一つは、一次資料の綿密な検証と分析から、既存の学問の外延と内包を再考し、当該研究分野のバージョンアップを図ることを目的としている。

ここで対象とする資料とは、東日本大震災で被災した昭和初期の日記資料である。この資料からは民俗学的な視点では取まりきれない、当時の社会状況や文化的背景を垣間見ることができる。資料が示す多様な情報をできるだけ十全に抽出し、分類し、デジタルアーカイブ化するという非常に地道な作業から、上記で示した研究領域の再編を促す糸口をたどり直したいと考える。

そこで、本論では、まず、日記と文字資料を巡る民俗学とその周辺領域での研究成果を概観し、研究上のテーマを設定する。次に本稿の具体的な分析対象となる日記資料の概要について説明する。その上で資料のデジタル化、データベース化の過程で生じた課題とそれらへの対処の過程で明らかになった分類枠の検証を行う。この分類枠は、日記のデジタル化を進めていくなかで累積的に変化していった。具体的な事例との往復作業のなかで、どのような変更が必要になったのかを確認していく。ここで抽出された分類カテゴリーを、既存の民俗学の外延と比較し、両者のズレを検証した。これらの作業を通してこれまでの民俗学の分類枠組みを批判的に相対化する作業を行い、近代化に関わる諸制度の浸透や新たなメディア網、交通網といった人々の生活文化を把握するために必要なカテゴリーを確認していった。

【キーワード】 デジタルアーカイブ、日記、KJ法、民俗の外延、近代、分類

## はじめに

本論は、民俗文化を読み解くための日記資料のデジタルアーカイブ化の手続きにおいて生じた課題と、そこで醸成された民俗学の外延の拡張と更新の可能性について論じる。

この小論は、やや遠大な目標のための序章的な役割を持つ。その目的は大きく二つに分けることができる。一つは、特定の学問分野（ここでは民俗学）が扱う資料の範疇を一般化することで共有度を高め、関心を異にする民俗研究者はもちろん、他分野の研究者や一次資料に関心をもつ一般の人びとにも利用可能な形態を構築することである<sup>(1)</sup>。

もう一つは、一次資料の綿密な検証と分析から、学問の外延と内包を再考し、当該研究分野のバージョンアップを図ることを目的としている。場合によっては、一つの学問分野の公理ともいえる位相を再構成することで、他の隣接分野との止揚を促すことも視野に入れている。もちろん、このような試みがこの小論のみでかなうとは考えていない。しかし、研究分野の汎社会性の獲得と分野自体の更新、さらには研究領域間の再統合は、人文科学に課せられた喫緊のテーマである。

ここで目指すのは、単なる抽象的なモデルの提示や理論的な思索ではない。また、既存のディシプリンに内属する手続きに基づいた一次資料の整理と解釈でもない。具体的な現場の資料の整理と分析をフィードバックさせることで、既存の研究領域の更新を促す道筋を提案したいと考えている。その具体的な資料とは、東日本大震災で被災した昭和初期の日記資料である。文化財レスキューの過程で見出された日記資料からは、民俗学的な視点では取まりきれない、当時の社会状況や文化的背景を垣間見ることができる。資料が示す多様な情報をできるだけ十全に抽出し、分類し、デジタルアーカイブ化するという非常に地道な作業から、上記で示した研究領域の再編を促す糸口をたどり直したいと考える。

そこで、本論は次のような構成を取る。①では日記と文字資料を巡る民俗学とその周辺領域での研究成果を概観し、研究上のテーマを設定する。②では本稿の具体的な分析対象となる「尾形栄一日記」の概要について説明する。③ではその日記のデジタル化、データベース化の過程で生じた課題とそれらへの対処の過程で明らかになった分類枠の検証を行う。この分類枠は、日記のデジタル化を進めていくなかで累積的に変化していった。具体的な事例との往復作業のなかで、どのような変更が必要になったのかを確認していく。④では、データベース化の裏面で構築された分類枠を、既存の民俗学の外延と比較し、両者のズレを検証していく。⑤で析出した分類枠を民俗学の外延の再措定と位置付けることで、これまでの民俗学の分類枠組みと比較するわけである。最後にこれら外延の改訂と並行して、内包の再構想の可能性と必然性についても示していく。

### ①……………民俗資料としての位置づけ

記録された史資料から「民俗」を捉えようとする動きは、近年、ますます盛んとなっている。そもそも、歴史民俗学や地域民俗学は、民俗事象の展開過程や系譜関係を明らかにするために近世文書や地誌などを恒常的に参照してきた。また、文献資料と聞き取り資料の併用は、民俗学の初発か

ら行われていた。ただ現在のような趨勢は、聞き取りによる資料収集が限界に近づいていることとも表裏の関係にある。今日の調査（2010年代）で聞き取れる範囲は、戦後から高度経済成長期に遡るのが関の山で、かつての民俗学が想定していた前近代的なムラのモデルからは完全に遊離している。

このようななかで、前近代から地域社会で記録されてきた様々な日記資料の分析と検証が、民俗学の射程に入るようになった。日記資料による民俗研究の概要は別稿に譲るとして、以下では、研究分野の大まかな流れと特徴について確認しておきたい。

民俗学における日記研究には、テーマの選択においていくつかの傾向に分けることができる。なかでも多くの論考が記されたテーマは生業研究である〔和田1988、永島1996・1997、湯川1997、安室2012〕。農耕に関わる生業暦や作物を育てるのに必要な期間や労働量などが主題化された。農業以外にも漁業や林業、商業といった複合的な生業の実態が検証されている〔安室1992・1995、川島2014、秋山・山本2012〕。

次に継起的に記された日常的な実践、すなわち衣食住、あるいは年中行事や通過儀礼などが主題化される傾向にある〔荻原1989、山田1996〕。衣食住では、儀礼食を中心とした事例や、食生活の変容についても日記を通して議論されている〔都丸1988、安室2012〕。また、福田アジオは近世の日記資料を元に村落共同体における民俗信仰、とりわけ村の支配層が関与する雨乞いの儀礼や虫送りの祈願などの実態を報告している〔福田2016〕。

これらの研究は、民俗学者自身によっていくつかのアドバンテージが主張されてきた。まず日記資料は、聞き取りでは不可能な過去の民俗事象を把握し、時系列的な分析を可能にする資料であるという点である。このような指摘は、とりわけ、歴史民俗学を推進した福田アジオに顕著に見られる。彼によれば過去の記録からは、現在では「知ることができない民俗の実在」〔福田2016:201〕の姿が浮き彫りとなる。世代を超えた連続性は個々の民俗だけではない。民俗の伝承母体とされるムラと近世の支配単位である村との連続性としても、遡及が可能であると捉えられる。確かに過去の民俗を知るために日記資料（を含めた文献資料）は重要なリソースになりうる。それらの資料の利用は、現行の民俗調査では不可能な過去の事例を確認できるだけではない。むしろ重要な点は、民俗の連続性はもちろん、それらの盛衰を視野に入れた動態過程を明らかにできるかもしれないのである。

次に日記資料は、定量化が可能な資料としての価値が見出されてきた。聞き取りのような冗長で叙事的な資料とは異なり、客体化された形でデータの提示が可能になると考えられてきた。この立場を推進してきた安室知は、「民俗データの欠点として定量化が弱い点が挙げられる」のに対して、日記資料の利用は、「今まで不得意だった定量的な部分を補完することができる」〔安室2012:52〕と述べている。とりわけ継続して記された日記資料からは、年単位での暮らしの様子を知ることができ、その具体的な様相を再構成することができたのである。

第3に民俗学者は、これらの文献資料と現地の民俗誌的な知見の両面に精通することで、相乗的な検証が可能になると主張する。この立場は、安室や福田だけでなく多くの民俗学者が主張している。調査地の現在を知ることで文献資料を補強したり、その現状との比較が可能になる。過去から現代まで民俗がどのような変遷を遂げてきたのか、類推することもできるだろう。もっともこの意見は、フィールドワークの重要性を主張しているものであり、それが民俗学者に特権的なものとは

言えないことは容易に想像がつく。文献研究者が自らの研究を補完するためにフィールドワークをしてはいけない、という規則は存在しないからである

さて、以上の主張がどの程度説得力を持つのかを測定する作業は、本論の目的から逸れるため、別稿にゆずることにしたい。<sup>(2)</sup>本論が当面の課題とするのは、過去の日記資料をデータベース化することで、いかに十全に資料化し、共約可能性を高めていくのか、という点を探ることにある。本稿の試みは、日記資料の定量化を巡る議論を促進する一方で、もう一度、質的なアプローチとの統合的な研究を行うことを目指すものでもある。データベース化の作業は、資料を複数の視点、複数のテーマから定量化しうるデータとなりうる。さらにこれまで試みられていなかった、異なる資料間の相互参照に対しても、視点を開くことになる。<sup>(3)</sup>

また、過去の民俗の復元を目指す歴史民俗学的な視座に対しては、ピックアップされる事例の偏りを指摘し、是正を要請する。先の福田は、「過去に書き記された資料のなかにあるもののうちどれを民俗事象と判断するかは、…現代の民俗に対する認識なり経験なりに基づいている」[福田2016:180]と述べているが、これでは、到底、資料に対する主観性や恣意性を払拭することはできない。先行研究の傾向を見てもわかるように、民俗学の対象は、生業研究を中心として年中行事や民俗信仰といった既存の民俗学の外延に収まるものが多くを占めてきた。それらが半ば自明のこととして対象化されてきたのである。

しかし、本当にそうだろうか。民俗学が地域社会に生活する人々の民俗文化を組織的、有機的に捉えようとするなら、日記に記された人々の生活の記録についても、より全体的なアプローチが求められる。特定の記述をピックアップして、定量的なデータへと変換するのではなく、書かれたものの総体を整理し、理解したうえで、改めて民俗文化の外延を確定するべきではないだろうか。

データベース化に向けての作業は、日記資料の内実に対して民俗学が対象とし得る範疇の狭隘さを克服することにつながるはずである。

フィールドワークとの相乗的な効果についても、文献資料のデータベース化は、重要な問題を提起する。フィールドワークによる資料と日記を含めた文献資料との間には、単に時代や環境が異なる以上に質的な差異が存在する。聞き取りに基づく資料は叙述的であり、定量化や時系列の整理には向かない場合が多い。しかし、聞き取りから得られる声とそこで喚起される記憶の質的な特質への注目、民俗文化研究の重要な橋頭堡となりうる。各々の資料の差異と切断面を見据えつつ、比較検討が可能な位相を設定する必要があるだろう。日記資料を単に翻刻するだけでなく、データベースとして活用できる水準にすることが、重要な作業になるにちがいない。

## ②……………尾形栄一日記の概要

### 尾形家について

本稿が紹介する日記資料は、宮城県気仙沼市小々汐地区にある尾形家が所蔵していた。尾形家は、地元では屋号でオオイと呼ばれている。小々汐は気仙沼市の中心部から内湾を挟んで東岸に位置する。世帯数は54戸、人口140名程の海沿いの集落だった。この小々汐とその周囲に位置する大浦、



鶴ヶ浦、梶ヶ浦という海沿いの村は四カ浜と総称され、生活圏としての結びつきも深かった(図1)。

小々汐地区の世帯の大半は尾形姓のため、各々の家は屋号で呼ばれることが多い。オオイは地元の総本家とされ、日々の暮らしや年中行事で中心的な役割を果たしてきた。資料によるとオオイの家は、17世紀以前に遡る歴史を持ち、18世紀以降、集落における代表的な役割を担ってきた。その役割は近代以後も継承され、一族からは村長や地方議員、あるいは教育者を複数名、輩出している。

小々汐地区は、2011年3月の東日本大震災によって大きな被害を被った。オオイの家屋も津波に流れ、家財の多くは流出した。それらの家

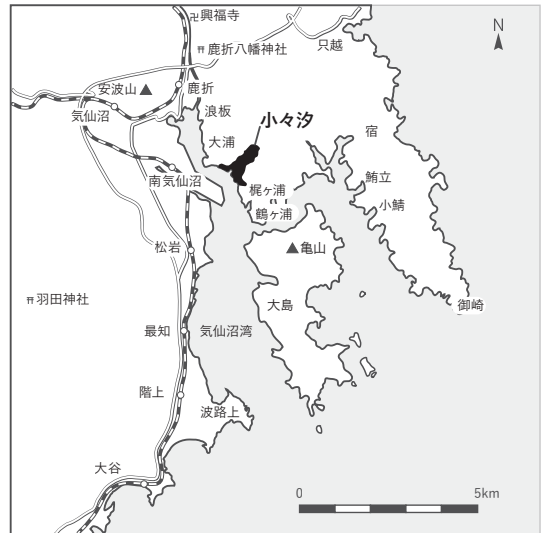


図1 気仙沼全体地図

屋とともに、仏壇やオシラ様などの信仰関係から漁具や農具、日常生活用具まで、できるだけ多くのモノをレスキューする試みが2011年の5月以後に開始された。レスキューされたモノは、洗浄と乾燥、脱塩処理などを行ったうえで、資料としての登録と保管が行われることになった。

尾形栄一氏の日記は、2012年の段階で尾形家のレスキュー作業が進むなかで発見された(写真1参照)。日記という個人の生活が記された内容のため、レスキューの一般的な記録化作業とは一応切り離し、国立歴史民俗博物館のスタッフを中心にその内容と保存の方途について検討がなされた。

そもそもこの日記は、現当主の尾形健氏にとっては父方オジ(FB)にあたる尾形栄一氏によって記されたものである。栄一氏は、健氏の父、忠行氏の弟にあたるが、彼らの父、良蔵氏是不惑を待たずして早逝している。日記が記された当ても、栄一氏たちの母親が忙しく働いていたことが確認できる。日記は高等小学校の最終年度にあたる1932(昭和7)年度とその翌年の生活を、ほぼ毎日記録している。この日記には当時10代半ばだった栄一氏が経験した尾形家の生業や年中行事、人生儀礼や民俗信仰、さらにそれらの様々な営みに関わる家族や親族たちの様子が簡潔に記録されていた。

もっとも、この日記に注目したきっかけは、国立歴史民俗博物館が2013年3月から行った第4室副室の特集展示『東日本大震災と気仙沼の生活文化』に際しての資料調査によるところが大きい。日記には1933(昭和8)年にこの地を襲った昭和三陸大津波の様子が克明に記されていた。そこでこの日記の一部を抜粋し、津波や地震について言及したハガキや手紙、チリ地震による津波後の御見舞帳などとともに紹介することにした。そこからは、この地域で繰り返される津波の被害と、それらを乗り越えて持続してきた人びとの暮らしのあり方が読みとれると考えたからである[国立歴史民俗博物館編2013]。

日記には3月3日の深夜に激しい揺れがあり、10分



写真1 尾形栄一日記(1932年)の表紙

近く続いたことが記されていた。揺れが止んだ後、一端、人びとは各家に戻ったが、30分程で「ごう—<sup>(4)</sup>—かだ—」という轟音とともに津波が襲来する。最初の津波に続いて複数回の波が押し寄せ、オオイの家族も山の手の親族の家に避難したとある。日記には、また、小々汐の人たちが、村のなかの田で火を燃やして、周囲の様子を把握しようとしたこと、波に運ばれて村内にも色々なものが流れてきたこと、尾形家では、イワシのカスが100枚程、薪用の松の木の枝が二棚ほど流出していたことなども記されていた。以上のように栄一氏の日記には、過去の震災が生々しく記されていた。そのような資料が今回の震災のなかで再び見出されたことの意味を問い直し、展示や図録を通して発信してきたことは、十分に意義があったと考えている。

## 日記に描かれた尾形家の諸相

このような大きな出来事の記録に対して、通常の日記の記述は非常に簡潔である。一見したところ、かなり義務的に日々の天気や起床と就寝時間、一日の勉強や仕事とそこに関わった人びとの名前が羅列されているように見える。しかし、日記の端々からは、当時の尾形家が従事していた生業の様子や行事の姿を多角的に捉えることができた。それらの日記の記述を整理し、まとめていくことで、民俗誌的にも重要な資料が記されていることがわかってきたのである。それらをいくつかの項目について説明していきたい。

### 1) 生業

日記には生業のカテゴリーとして漁業と農業についての記述が目立つ。まず漁業では、栄一氏が主に関わった作業として、海苔養殖とイワシ漁にともなうカス作りに関わる作業が繰り返して記録されている。また、海苔とともに牡蠣の養殖も行なっていたことが窺われる。これらの作業の多くは、小々汐の同族との共同作業を前提としており、どのような立場の人がどのような作業に従事していたのかを検証していく糸口になるだろう。

一月二日月曜

朝仕事に海苔ほすをする。新場のはせを借りる。かすをかわいた所に出す。のりかへしかすがへし。いそがしい。夕方かすを入れる。海苔は少しのこして皆上った。

いわしはおそく来た。少しなのでほすとじをする。

最初に朝からノリ干しの作業が行われていた様子が記されている。「新場」は屋号で、オオイのシンルイの家の一つである。カスとは、イワシを炊いて油分をぬいたものを、干して作るもので、肥料として販売される。それらはともに表面が乾いた段階で、裏面を向けねばならない重労働だったようである。オオイの家では、収穫したノリやイワシの加工を手伝い人に頼みながら、並行して行っていたことがわかる。

もう一つ興味深いのは、現金収入とは直結しないような海での活動が、幾度も記されている点である。それらは主に栄一氏本人とその兄弟たち、時には祖母を交えて行なわれるもので、自家消費の側面が強い。その意味ではマイナー・サブシステムとしての漁や採集活動と言えそうである。

具体的にはアサリやサラ貝といった貝類、タコやボラ、オオガイの釣り漁などが記録されている。1932(昭和7)年の9月には、次のように記されている。

朝早くおきて兄さんと二人で出船。ばんそのあたりをひっぱる。つらない。うどうに行って小たこ一枚(おれ)つった。

晝すぎにぜ〇〇あ等をひっぱる。つらない。

夕方近くかどぼらに行く。兄さんは二枚。おれ二枚。となりのおどやは一枚つった。大漁なのでよろこぶ。

ここでは栄一兄弟が、船で移動しながらタコを釣っている姿が記されている。「ばんそ」や「うどう」、「かどぼら」といった地名は、いずれも、海岸部を起点とした海での呼称のようである。このタコの開口は、新暦では8月30日となっていた。また、釣れたタコは、同じ小々汐内の「新場」に持っていくと買い取られていたことがわかっている。ちなみにこれらの採集活動のなかで換金を確認できたのはタコだけである。かなりの頻度で釣られているオオガイなどは、どのように利用されていたのかさえ、日記には記されていない。<sup>(5)</sup>ちなみにオオガイは、ウグイ (*Tribolodon hakonensis*) の降海型で汽水域に住み、体長は40cmを超えるものもいる。現在の聞き取りによると、オオガイの身は柔らかく、また小骨も多いため、あまり食べるのには適していなかったようである。しかし、身から良い出汁が出るので、囲炉裏の上などに干しておいて、汁物などに利用することがあったという。

漁業と並行して農作業についても繰り返し記されている。当時、尾形家では、小々汐内だけでなく、地区の対岸にあたる気仙沼市田中前や神山周辺の土地で水田を耕していた。そのため田中前はもちろん、神山、崎山といった地名が繰り返し登場する。これらの田仕事、とりわけ田植えや稲刈りなどの作業でも、多くの親族が作業に参加している様子が描かれている。同じような共同作業は、麦の刈り入れや豆の収穫の場面でもみられ、各々の作物も相当量、栽培されていたようである。この他に大根、豆類、十年(エゴマ)、カライモ(ジャガイモ)などの畑仕事の様子も確認することができる。

## 2) 家族・親族

これらの生業と密接に関連して登場するのが、家族・親族や地縁関係のつながりである。日記には、小々汐内の生業や家業の「手伝い」にくる地縁、血縁に連なる人びとが頻繁に登場する。すでに記したようにオオイには、小々汐のなかでもシムルイと位置付けられる家が存在する。それらの家とは、生業の手伝いはもちろん、季節の節目に行われる年中行事や衣食住においても、密接なつながりを持っていた。仕事の種類によって「～のおどや(父)」や「～のおがや(母)」というふう

にジェンダーごとの差異も記されることが多い。

また、唐桑や明戸<sup>あけど</sup>、二十一といった気仙沼近隣の親族も様々な行事ごとにオオイを訪れる。これらのネットワークと生業や行事がどのように結びつくのかも、今後、検証していく必要があるだろう。

### 3) 衣食住

衣食住のなかでもっとも記録されているのは、「食」の分野である。なかでも頻繁に登場するのは、様々な儀礼食に用いられる餅である。その他にもトコロや小麦粉を焦がしたコウセンなど、季節ごとに特徴的な食事が記されている。「住」の数は多くはないが、年末や来客に対応した掃除の際にオクやデイといった部屋の名称が記される。また、庭や蔵などを含めた労働作業の場所についても記録されている。それらに対して日常的な衣料について、改めて言及されることはあまりない。それでも、街で購入してきた帽子や靴などは広義の衣料に関わるエピソードである。他にも冬期にそなえた長靴などの購入や街で購入した衣料については若干の記録がある。また、昭和大津波の際にも、自らの衣装についての記述を確認することができる。

### 4) 年中行事

年中行事は、この日記のなかで頻繁に記述される。とりわけ、正月と盆前後の行事が集中する時期には、簡潔ではあるが、様々な行事が執行されていたことがわかる。また、桃の節句や端午の節句、あるいは七夕についての記述もみられる。次の記述は、1932（昭和7）年のススハキの様子を記した部分である。ちなみにこの行事は、旧暦の12月16日に行われている。

一月二十三日 土曜 晴 起=七時十分前 寝=八時二十分

今日は家のすゝはきです朝早くから外の家の

人が来て居ます。朝はかなり早かった。

先生が居ないので自習をした。五時間目は

ボールをした。今日がかりの週番なので書いた。

家に来たら外の人たちはおしめ等をこしらへて居た。

庭をはいたりした。今夜はすゝはきもちです

たいへんにうまいのでたくさんに食べました

夕はんがすぎたら鬼うつまめをまいた。

まめをたべた。大だしに大ぜい居たのであそぶ

まめを食ってねた。

正月を迎えるにあたっての家中の大掃除と年越しの準備がススハキである。この日は、オオイの親族が集まり、各々の作業に従事した。「外の家の人」とは、小々汐内のシムルイと呼ばれる人々のことである。当日は、新暦では平日に当たり、栄一氏は、学校に通っている様子もうかがえる。家では、正月用の注連縄が作られ、儀礼食としてのススハキモチが用意された。さらにこの日、オオイでは「鬼うつまめ」をまいていた。このように日記には、年中行事が地域と複雑に結びつき、すでに記した地縁・血縁とも関連性が高いことを示している。

しかし、それだけではない。記録された年中行事には、小々汐という地域に限らない事例も含まれる。地域外の行事や催しがあり、そこに栄一氏を含めた尾形家の人びとが参加していた様子も描かれている。また日記には、近代的な生活のなかで年中行事化したものもみられる。その一つは学校



---

行事である学芸会や運動会である。それらは子供たちだけの行事ではなく、その家族や場合によっては地域の催しであったようである。

二月九日木曜晴起 = 五時半 寝九時  
今日は浦島分校の学芸会です。  
旧の十五にちで休みなので僕も行って見る。  
家ではおばあさんとお母さんきりのこって皆行く。  
終りまでみる。中學校の先生は来た。  
家に来てなまこひっぱりを知行とした。  
今夜はうたいこみだ。知行ははまる。

これは、1933年の2月9日の日記である。旧暦の1月15日、小正月に当たる日であった。小正月は、様々な行事が行われる日であったが、それと合わせて「浦島分校の学芸会」が行われる日でもあった。浦島分校とは、小々汐を含めた四カ浜の子弟が通う小学校である。この日には、祖母と母親以外の全員が、学芸会に参加したと記されている。小正月の休日とも重ねられることで、学校行事が地域に定着していたことがわかるだろう。ちなみに、帰った後に栄一、知行兄弟が行った「なまこひっぱり」とは、小正月の子供の行事であった。名前の通り本物のナマコをワラヒモに結びつけて引きずっていく。これは予祝儀礼の一つと捉えてよさそうである。

## 5) 人生儀礼

ライフコースの節目に行なわれる人生儀礼についても、日記に記されている。とりわけ、関心をひくのは、1932年の祖父貞七氏の臨終から葬儀、さらに四十九日までの行事が、記録されている箇所である。また、尾形家の親族の婚姻に出席した記録、さらには栄一氏の甥っ子の出産の記事も記されている。1933年5月の記事である。

五月十五日 晴 (月) 起 = 六時二十分 寝 = 八時  
・・・おばさんは赤んぼうは出さうなので、小屋坂の(サンバ)は来た。  
・・・家についたら『おぼ子』は生れたそう。四時頃だそう。安産で皆安心。  
男の子だそう。大二是よろこぶ事だろう。

これは栄一氏の姉にあたるヒデノさんが生家に帰って出産した経緯を記している。大二是彼女の息子であり、栄一氏にとっては甥っ子(ZS)にあたる。この時期はまだ、家に産婆をよんで子供を取り上げてもらっていたことがわかる。

いわゆる冠婚葬祭は、年中行事に比して特別な出来事と意識されることが多い。けれども、2年間という限定された期間にもかかわらず、地縁・血縁のネットワークの広がりの中なかでは、毎年のように何らかの人生儀礼が発生していたことが理解できるのである。

## 6) 民俗信仰

民俗信仰もまた、家族・親族や年中行事と密接に結びついており、日記の端々にこのカテゴリーにあたる記述がみられる。日記のなかには、一家のほぼ全員、あるいは家族の一部が檀家寺に参った記事やエビス講、あるいは金比羅様、天王様、ミョウジンサマなど、家内や小々汐地区でお祀りしている様々な小祠に対する信仰の様子が記されている。また、家の神であり、おそらくは集落の神でもあったオシラサマについての言及もあり、口寄せと思われる記述も残されている。次の日誌は、1932年に祖父の貞七氏が逝去し、野辺送りが行われた翌日の記述である。

十一月十六日 ×水曜 晴 起=七時半 寝=八時半

朝早くおしょうこに行く。

今日はクジヨセだ 朝早くおおかみむかひは 行く。

おつかひ<sup>(ママ)</sup>にあるいた。クジヨセ始まつた。<sup>(ママ)</sup>

×僕の事ははかの右左に色のある花をう

えろとのことだ。

今夜は念佛×を申す人は来た。

クジヨセ=口寄せは、カミサマと呼ばれる盲目の巫女によって行われる。カミサマを家に呼ぶために迎えを送り、口寄せが行われる旨を栄一氏たちが触れて回ったようである。口寄せの際には、死者の言葉として、主な親族たちに注意やアドバイスが述べられた。栄一氏には、「はかの右左に色のある花をうえろ」と伝えられたようである。この前後に記される「おしょうこ(焼香)」や念仏は、49日まで繰り返し記されている。

このように「日記」には民俗学の外延に当てはまるエピソードが数多く見られる。これらの資料のなかで意味が不明な箇所については、随時、地元の話者、とりわけ尾形家のご家族から聞き取り調査を行うことで、データの補強を行っていった。これらをピックアップするだけで、十分に興味深い資料を得ることができただろう。個々のテーマに着目した各論については、稿を改めて議論することにしたい。

しかし、最初に述べたように、この日記には、いわゆる民俗資料とされうるもの以外にも興味深い記述が数多く見られた。類似の記述が累積的に見出されることで、新たな分類項目を設定する必要性がでてきた。次節と次々節では、その詳細について紹介していくことにしたい。

## ③……………資料化の過程

### エクセルによるデータの格納の概要

この章では、データベースの作成過程とそこで生じた問題についてまとめていく。

既述したように「尾形栄一日記」のテキストは、当初、ワードファイル(ワープロソフト)を用いて翻刻を行っていた。複数の調査者が文字を起こしたため、とりあえず、全文をテキストの形態

にそって、行ごとに再現する方向を目指した。テキスト中にはペンによる訂正や、入れ替え記号なども使われており、なるべく原文に近い形態のデジタル化が目指された。

その後、それらのテキストを全てエクセルファイル(表計算ソフト)として記録することにした。この時点で単なるデジタル上での翻刻ではなく、より有用度の高いデータベース化が念頭に入っていた。尾形家のレスキューでは、「栄一日記」以外にも、大正から昭和にかけて、複数の家人が記した日記が見つかった。今後、それらのテキストを検証し、相互に参照する場合にも、データベース化の作業が必要とされる。その試作の意味も込めて「栄一日記」には、付加情報とその分類枠について試行錯誤が必要とされた。このエクセル化の過程は、基本的には一人の研究者が担当した。

最初にエクセル上では、基本情報の付加を行った。すべてのデータには、テキストの作成年月日とテキストの元のページの位置を付与した。また、基本情報として、旧暦の年月日の項目も加えることにした。日記の表記は新暦であったが、記載されている行事などでしばしば旧暦との対比が記されていたためである。(この作業で機械的に新旧の暦を対応させるのは困難であった。日記には、時々空白時期があったこと、1938(昭和13)年に閏月が入っていたことなどがその要因である。)

次にテキストをどのように分割して格納するのかという課題が浮上した。これにはいくつかのやり方があり、多くの場合はパラグラフごとの分割が多い[近藤2005, 2006]。ただ今回は、テキストのデジタル化段階で原文の形態を保持する方向で作業を行ったため、基本的にはライン(行)ごとに格納することにした。もとの文章が比較的簡潔に記載されているため、このやり方でも意味の分節化には支障をきたさないと判断した。ただし改行された行があまりに短い場合は、セル内で改行を行って格納することも、例外的に行うようにしている。以上の作業に加えて、各々のラインが何を意味するのかを示す項目を付与していった。

そこで、第3にキーワードの抽出を行った。各行のキーとなる言葉はもちろん、独特の意味や方言と思われる単語なども抽出することにした。これらには、当初、天候や地名、人名なども含まれていた。しかし、テキストを読み込んでいくと、いくつかの問題に直面することになった。まず、キーとなる単語の表記にブレが見られたことである。

例えば、日記にはオオダシという小々汐内の地名が頻繁に登場する。しかし、その表記は片仮名表記であったり、「おおだし」と平仮名で書かれたり、「大だし」、あるいは「大田し」と漢字と仮名で表現されることもあった。あるいは、オオガイという魚名—それがどのような魚を意味するのかも、当初わからなかったが—も、複数の表記で記されていた。すなわち、「おうがひ」、「ヲウガイ」、「オガイ」といった具合である。②でも触れたようにオオガイという魚は、淡水に住むコイ科のウグイの降海型である。汽水域に住み、体長は40センチを超えるものもいる。

ちなみに地元で、オオガイについて複数の話者、それも釣り経験のある話者に尋ねたところ、オオガイという発音では、あまり意味が通じないことが多かった。あえて表記するならば、「オゲエ」ないしは、「オオゲエ」と発音されているようである。今後は、このような聞き取り資料による発音と表記とのずれについても検討する必要がある。というのは、この昭和初期に記された日記では、しばしば、動詞表現として「～する」を「～しる」と記したり、「干し」という体言止めを「干す」と書いたりする事例がみられた。これらは気仙沼における発音と文字表記との対応にゆれがあったことを示している。場合によっては、より音声言語的な表記が試みられていたともいえる。そのよ

うな動態的な資料としての意味を問い直すためにも、現在でも用いられる方言の音声的な特質を文字言語に還元するべきではないだろう。

ただし表記のズレをそのまま、キーワードの「行」に格納しては、検索することができないため、頻出度の高い言葉に合わせて表記を統一することにした。

また、あまりに特定の単語が頻出したために他の語彙とは区別すべきだと判断したキーワード群もあった。その一つが、人名と屋号である。この日記では、多くの人名とともに屋号が登場する。小々汐では多くが尾形姓のため、家を指す場合には屋号を用いている。もっともよく登場する屋号は「仁屋（ニイヤ）」であり、このほかに「トナリ」「田畑」などの屋号とその家人が何度も登場した。生業での共同作業や年中行事などでは、多数の手伝い人がやってくるため、彼らについての記載も、屋号と名前が並存していた。日記では、「仁屋のおとど」や「仁屋のあねご」といった表現が用いられていた。これらは仁屋の家の父さん、姉さんといった意味である。このように頻出し、独自の注釈と記載基準が必要となる語彙は、順次、「列」として独立させていった。

第4にこのデータベースの要となる分類項目の位置付けがある。これは、日記のなかでどの箇所が民俗文化に関わるかを示すための作業であった。当初は、キーワードを抽出したうえで、民俗文化の既存の分類を踏襲するつもりであった。すなわち、祭りや元旦といったキーワードならば、「年中行事」、海苔やイワシ、あるいは田植えや稲刈りといったキーワードならば「生業」といった分類が可能であると考えていた。ただ、生業にも、「漁業」や「農業」といった下位項目が必要になることは予想された。そこで、民俗学の教科書的な分類を「大分類」とし、二つの列を設けた。これは、一つの行のなかに複数の分類項目が含まれることが想定されたからである。そのうえでより具体的な「小分類」の列を設けることにした。

## 民俗の分類項目

こうして初期段階で設けた「大分類」は、表1の通りである。これは、民俗文化を分類するうえでのオードソックスとして、カテゴリ化したものといえる。事前に参照したわけではないが、民俗学の調査手引きとして著名な『民俗調査ハンドブック』[上野他編 1987]と地元の気仙沼市史の『民俗編』[気仙沼市史編さん会編 1994]の目次を抜粋したものが表2になる。あらかじめ記しておく

表1 分類の初期設定

大分類	小分類	各項目、備考
家族、親族、地域の人間関係	地縁、血縁	
農業他	水田、ムギ、大根、など	
漁業	海苔、カキの養殖、イワシ	生業の項目が多いため、漁業と農業に分けて大項目とする
衣食住	衣料、食事、食材、住居、掃除	
年中行事	正月、ススハキ、盆など	
通過儀礼	誕生、葬式、婚姻	
民間信仰	おしら遊ばせなど	
交通、商工業、地域外との関係	船、汽車などの交通手段、諸職	
近代制度	学校(教育)、郵便局(情報)、交通網など	



と、日記の分類項目には、民俗誌や民俗学の概説書では必ず設定されている「口承文芸」に相当する項目が見られない。これは初期の文字起こしにおいて、当該項目に当てはまるものが見つけれなかったためである。

口承文芸以外の項目を確認しておく、データベースの大分類が、民俗学の概説書や市史の章立てとほぼ対応していることがわかるだろう。「大分類の「生業」は、市史の「生業」とハンドブックの「生業と技術」に対応している。同様に「通過儀礼」と「衣食住」、「信仰」も、市史の「人の一生」と「衣食住」、「民間信仰」、ハンドブックの「人生儀礼」と「衣食」と「住」、そして「信仰」の章に対応している。ただ「年中行事」と「親族・同族・地域の間関係」は、ハンドブックでは、「年中行事」、「家族と親族」、「村落組織」に対応しているが、市史では「むらの生活」に収斂されている（表2参照）。暫定的ではあるが、大分類の「生業」、「衣食住」、「親族・同族」、「社会組織」、「年中行事」、「通過儀礼」、「信仰」の7つの項目は、民俗学において共有度の高いカテゴリーと考えることができるだろう。

ところでデータベースでは、初期の設定からすでに「近代」と「交通・商工業」という項目を立てていた。

「近代」とは、日記の主体である栄一氏の通う学校での生活と、日記に頻出する軍隊に関わる記載などである。当時の子供たちにとって学校生活は、家や地域における他の様々な活動とも密接に結びついていた。栄一氏が盛んにとりあげるスポーツは、学校教育のなかで体得されたものである。

表2 章立てに見る民俗の外延

民俗調査ハンドブック		気仙沼市史 民俗編の目次	
章	節	章	節
村落組織		第1章 衣食住	第1節 住居
家族と親族			第2節 衣服
生産と技術	農業・漁業・狩猟・林業・諸職・交通・交易	第2章 生業	第3節 食習慣
			第1節 漁業
第2節 狩猟			
第3節 林業			
第4節 農業			
衣食		第5節 交通と交易	
住居		第3章 むらの生活	第1節 むらの講
人生儀礼	産育・婚礼・葬制・墓制		第2節 旅の宗教者
年中行事			第3節 芸能
信仰	神社祭祀 民間信仰 俗信・禁忌 仏教民俗		第4節 年中行事
芸能		第4章 人の一生	第1節 誕生
口承文芸	昔話・伝説 民謡		第2節 婚姻
地名			第3節 葬祭
都市の民俗		第5章 言語伝承	第1節 子供の遊び
			第2節 地名
			第3節 方言
		第6章 口承文芸	第1節 なぞとことわざ
			第2節 民謡
			第3節 語り物
第7章 民間信仰	第4節 昔話		
	第5節 伝説		
	第6節 世間話		
		第1節 呪いごと	
		第2節 むらの神々	
		第3節 むらの宗教者	

季節の節目で行われる運動会や学芸会は、学校行事に留まらず、父兄を含めた村や地域の催しとして行われていたこともわかってきた。また、栄一氏が高等小学校を卒業後に通っていた公民学校では、農薬（ボルドー液）や化学肥料の作り方についての講習も行なわれていたようである。

学校と並んで記録されているものとして軍隊に関する記述が目立つ。そこでは徴兵のために故郷を離れる兵を見送る様子、逆に凱旋してきた兵士を迎えるために学校が休校になったことも記録されている。当時の世情を反映しているのは、軍の高官が栄一氏たちのような10代半ばの少年に、日本の軍隊の概要や満州の権益について訓示したことまでが残されていることである。

両者はともに近代以降、地域社会を覆う国民国家の制度的布置のもとに日常生活に組み込まれたものである。その意味では、民俗学のカテゴリーとは対極にある項目として、一括しようとしたのであった。ただし後に述べるようにこの視点は、大きな修正を加えることになる。

もう一つの「交通・商工業」はワードでの翻刻の段階で注視していたカテゴリーであった。日記の中には、多くの地域外の人びとが訪れる。それは、位牌などに漆を塗り直す塗り師であったり、家の補修を行う大工であったりする。ときには一ノ関から新聞の購買を勧誘する者が尾形家を訪れたりもしている。彼らのように地域外部から訪れるものの多くは、何らかの商いに従事していた。そこで、彼らとのつながりまとめて、交通と商工業でくくり出そうとしていた。

これらは、日記をあらかじめ読むことによって設定した項目である。しかし先行研究の具体的な事例にまで踏み込むならば、すでに近代以後の日記資料について、軍事体制や学校制度についての記述に注目し、分類枠として捉えていた研究もみられた〔小川1990〕その意味では、本論における研究史の吟味が不足していることは否めない。しかしながら、先行する研究論文や報告においても、このような分類レベルでの平準化や一般化については言及されていない。個々の研究では、既存の範疇を更新する議論が行われていても、それらを研究分野全体へと送り返す体系だった議論は行われてこなかった。また、個々の分類項目を抽象化し、階層化された分類間の関係の束として理解されていない可能性もある。しかし、問題はこれだけで終わらなかった。

作業を進めるなかで分類に手間取るもの、新たな分類項目を必要とする記述が多数見出されることになった。データベースの大分類、小分類欄には多くの空白、ないしは「その他」に該当する項目が増加していった。そのため次節で示すように、これらの分類項目を改変し、さらには、「列」項目への移動など、データベース自体の更新を必要とすることになったのである。

## ④……………民俗文化の分類項目の内包と外延

### 分類項目の更新 1

この節では、分類の過程で生じた課題を通して、分類項目自体の改変とデータベースのデザインの更新について説明していきたい。すでに述べたようにこのような作業は、個別の研究者の視点が介在せざるを得ない。研究者ごとの視点によって生じるバイアスを避けるためには、2通りの平準化の努力が考えられる。

その一つは、作業過程を他の研究者にチェックしてもらう段階を設けることである。これらの作

業は、社会学者がトライアングレーションと呼ぶ作業に相当する [近藤 2005]。すでに述べたようにエクセル化の過程は、ほぼ一人の研究者がデータベース化を行ってきた。これは人的資源の不足という側面が主要な要因だが、それが全てではない。この日記は古文書の読解ほどに専門的な知識を必要としないが、代わりに多くの民俗誌的な知識が必要とされる。特に地名や人名、屋号などについては、地域でのフィールドワークを並行して行わなければ、キーワードの付与にも手間取ることになる。

非常に卑近な例を挙げると、日記の中には「釜屋」という記述が何度か登場する。釜屋はオオイにきて何らかの作業をしていることが多かった。当初、この釜屋は、漆職人や大工などと同じ職人だろうと考えていた。ところが、フィールドワークを進めるなかで、じつはこの「釜屋」がオオイの第一別家（分家）のさらに分家の屋号であることがわかった。釜屋からものを借りるといった日常的なやりとりも記されているため、記載対象が村の中の親族であることは確定的となった。このような微細なレベルを見誤ると、本文で述べた大分類でも、この項目は「交通・商工業」になってしまう。このようにできるだけ地域についての知識が持ち合わせる者が、ある段階まで作業を行うほうが、むしろ効率的でさえあった。そこで複数の研究者の視点による検証は、データベース化の作業がある段階まで進んでから行うことにした。

そこで、もう一つの方向での平準化を優先的に行った。それは、日記テキストへのフィードバックである。そもそも、この作業が必要になったのは、既存のテキストに、当初の分類項目には当てはまらない項目が増加していったことにある。従来の民俗文化を抽出する作業だけならば、分類項目に空欄が増えていっても、特に問題はなかっただろう。しかし、翻って考えるならば、分類項目の空欄の増加こそ、民俗学的な視座のバイアスや限界に他ならないのではないだろうか。空欄の多さは、日記を記した個人とそれを取り巻く家族や地域社会の実践が、民俗誌記述に、ひいては民俗学に収斂しないことを意味する。だとすれば問題は、既存の民俗学の分類枠にこそあると考えるべきである。空欄となる項目を放置するのではなく、より多くの検索可能な分類項目を適用することが、テキストを包括的に捉える視点を構築することになるはずである。

このような視点は、文化人類学者の川喜田二郎が自らのイニシャルを用いた KJ 法の視点に準拠するものである。KJ 法とは、川喜田が、多様な資料を包括的に把握し、データの全体像を図像化したり、文章化したりするために開発した方法である。KJ 法の作業は、大まかに次のようにまとめることができる [川喜田 1967]。

- (1) 調査過程で収集した多様なデータをカード化したうえで、「一行見出し」という手法でコンパクトに整理する。
- (2) そのデータを残らず整理し、分類しながら、全体像を「図式化」という方法を提案した。これが KJa 法と呼ばれるものの過程である。
- (3) この KJa 法で得た図式をもとに論旨を整理し、それらを文章化する手順を作り上げた。こちらが KJb 法と呼ばれる方法である。
- (4) これらの方法を通じて、複数の人間がそれぞれの資料やアイデアを持ち寄りながら、統合的な議論を創造する可能性を指し示した。

まず (1) について川喜田は、「一行見出し」とは、資料を「単位化しかつ圧縮化することである」

[川喜田 1967:72] と述べている。本論が最初に示しているキーワードとは文章から語彙を抽出するというよりも、彼の「一行見出し」の位置付けに近いものがある。

次にこの KJ 法のなかで、もっとも重要な作業の一つとして、KJa 法の図式化がある。ここでの図式化とは、見出しのなかで関連するものをグルーピングしていき、資料全体の配置図を作成することである。同時に、それらをグルーピングする際に、各々のグループがどのような性格をもち、グループ間がどのような関連性を有しているのかを前景化することを指している。

関連付けにおいて注意すべきは、先入観を持って分類してはいけないということである。予見や先入観をもって見出しをはめ込んでしまうと、資料がもっている多様性や可能性を矮小化することにつながる。また、その逆に字面に流されて表面的なつながりで分類を行ってもいけない。この一見矛盾した指摘は、川喜田が具体的に上げていく事例によってある程度理解することができる。彼の事例では、図式化から文章化へと変換される過程で、ある程度、論旨がつながっていく項目が一括りに分類されていることがわかる。ある見出しの内容を裏付ける議論、その議論に対する別の意見、それらの意見をまとめたうえでの新たな見解、といった見出し自体が論理展開を持っているかどうか、重要な点であると考えられる。要するに見出し群に潜在している様々な論旨を断ち切ったり、削ぎ落とさないようにしながら、意味の固まりをみつけだすバランス感覚が必要であるといえる。

もう一つ重要なことは、分類の際に大分類から順に細かく分類してはいけないという点である。むしろ個々の小さなまとまりから大きなまとまりへと構築していかねばならない。大分類から始めてしまうと、どの分類にも収まらない項目が必ずでてくる。それでは、孤立した項目の意義を十分に考慮しない議論をうみだしてしまう危険性がある。

逆に小項目から始めた場合、孤立した項目を全ての分類群にわけるとは必要はない。孤立した見出しはそのままにしておき、より包括的な分類の際に改めて吟味できるようにしておけばよい。つまり、最初の小分類が終了すると分類ごとのつながりや関連づけをおこない、中規模のまとまりをつくる。こうしてできた中規模の分類事項をさらに大きな枠組みで縁取っていく。このそれぞれの段階で、孤立した見出しも考慮していき、最終的に一つのまとまりのある図表を完成することがねらいなのである。

見出しを包括的に捉える視点は、データベースの分類にも活かすようにしている。以下では、便宜上、大分類から日記の項目を説明しているが、この展開の過程は、実際には、次のように逆の過程を経ていたのである。すなわち、①日記の各行ごとのキーワードの析出、②キーワードごとに共通するカテゴリーの抽出による小分類の作成、③小分類間のつながりの確認と大分類の作成、あるいは既存の大分類のカテゴリーの変更、という手順である。以上のようなテキスト内で関連する項目を抽出し、それらを特定の分類項目として新たに設定し直すことが、実は、既存の民俗誌の外延を拡張する作業につながっていったのである。

ところで、データベース化の作業の展開過程は、「列」の増加と分類項目の更新、統合の二つの手順を踏むことになった。この作業の展開過程のなかで、初期の分類項目 (ver1.0) と中期 (ver2.0)、そして、最新バージョン (ver3.0) の三つの段階に大別して、説明していくことにする。<sup>(6)</sup>

初期の項目は、前節で紹介した通りである。これらの項目の具体的な事例についても、すでに②で紹介したものが多い。なお、中期 (ver2.0) で示される大分類の「社会組織」については、初期の設定の後に程なく加えたカテゴリーである。教科書的には「村の組織」、「村落社会」と包括され



る領域であり、本来はオーソドックスな大分類のカテゴリーのはずである。しかし、尾形栄一日記の記述の多くは、「親族・同族」や「生業」に収斂していったため、「村」ないしは「社会」という範疇の設定が前景化されにくかったのである。しかし、年中行事や様々な共同負担などの背景に、行政村や地域社会の諸制度を考慮することで、改めてこの大分類を設定することになった。

これらのオーソドックスな事例に加えて、既述したように「近代」と「交通・商工業」の項目を立てていた。前者は近代以降、地域社会を覆う国家の制度的布置のもとに日常生活に組み込まれたものである。その意味では、民俗学のカテゴリーとは対極にある項目として、一括しようとしていた。もう一つの「交通・商工業」は、地域社会に対する外的な関係性という点で、民俗学的な範疇を超えてきている。これらの項目は、ともに既存の民俗学の章立てからは逸脱する事例ではある。しかし、あくまで民俗誌の章立ての剰余項としての側面が否めない分類でもある。おそらくこの段階で止まっていたのであれば、民俗学自体の外延の再構築という方向に進むことはなかつたろう。

しかし、現実には、このような分類項目を用意しても、どこにも該当しないテキストが増加していった。初期において分類項目に当てはまらないものは、「その他」としていた。もっとも、「その他」とは分類に関する判断放棄にほかならない。そのため、テキストを読み込んでキーワードと分類項目を付与していく過程で、適宜、分類枠自体の更新を行う必要が生じ、その過程についても記録していくこととした。これらの作業は非常に煩雑で、場合によってはこれまでの作業が徒労に帰することもあった。しかし、作業の中盤からは、民俗学の対象分野の外延を拡張しうることが予想できたため、あえて、この往復運動を行うようにしていった。

この作業が本格化した中期（ver2.0）までの更新についてみていきたい（表3）。この過程では大分類の増加とともに、「列」項目の増加が目立つ。すでに記したようにキーワードについては、屋号を別の「列」に置換した。その後、地名と人名についても、聞き取り調査の情報を加えるなかで新たな「列」として独立させた。地名の場合、頻出する地名のいくつかは、尾形家から婚出した親族をさすことがあった。これらの含意を考慮に入れて新たに「列」を加えておく必要があったのである。さらに日々記されていた天候、気象についても、「列」に加えた。

一方、分類項目としては、中期の段階で「娯楽・遊戯」と「医療・衛生」という項目を加えた。前者の範疇は、すでに紹介した気仙沼市史の民俗編には「章」として登場していた。それらを考慮しながらテキストをみていくと、そこには当時、10代半ばであった栄一氏が兄弟や友達と様々な遊びをしていることが把握できた。そこで、これらを新たに大項目として加えることにしたのである。同時に考慮されたのは、学校での授業や放課後の遊戯と考えられるものに、多くのスポーツ名が登場したことである。彼は友人たちとドッチボールや野球、ピンポンなどに興じたことも記している。そこで、この項目の小分類には、「娯楽」、「遊戯」、さらに「スポーツ」というカテゴリーも加えておいた。

また、娯楽というカテゴリーを設けることで注意したかったのは、これまで副次的な生業と捉えていた記述には、実は、娯乐的な要素があるのではないか、という点であった。とりわけ、栄一氏が兄弟や友人と盛んに行っていた魚釣りやタコ釣りは、仕事というよりは娯乐的な要素が高かったと考えられる。よって、このような事例は大分類において、「生業」と「娯楽・遊戯」を併記する必要があった。他方で、室内の娯楽としては、将棋や模型の制作が記されていたが、しばしば『少年倶楽部』のような雑誌の購読が行われていたことも分かってきた。こちらの場合は印刷媒体という

表3 分類の中期設定

大分類	小分類	キーワード	各項目、備考
家族・同族	家族、親族、同族	家族・親族呼称、屋号、地名	親族から概念を拡張、地縁・血縁のうち、「地縁」に近い関係性を「同族」という語彙で併記し、下位で分節化。
農・林業	農業、林業、漁業	水田、ムギ、大根、ジュウネンなど 林業、その他の生業	
漁業	カキ漁、イワシ漁、ノリ養殖、ドウシバ、釣、タコ釣、	カキ漁、イワシ漁、ノリ養殖、ドウシバ、釣、タコ釣、	カス=イワシ漁
社会組織	講、寄合、	講、手伝い	
衣食住	衣、食、住	儀礼食、モチ、コウセン、 部屋名、屋敷地名 衣服、靴、雨具など	
年中行事	年中行事	正月、祭り、講、農耕儀礼、盆、近代の祝日、学芸会、運動会など	
通過儀礼	婚姻、葬式、出産	婚姻、葬式、初盆、お産、	卒業、入学など近代制度も含む
民俗信仰	民俗信仰	お参り、オシラサマ、オヨウゴモリ	
交通・情報	文字、印刷媒体、レコード、映像、郵便	情報:少年クラブ=雑誌、活動(写真)などのカテゴリー	情報、交通を新たにカテゴリーライズ、商工業、地域外との関係も含まれる
商工業	商業、工業、職人	商業 職人 地域外との関係も含む	
近代化	学校、教育、軍隊、	学校(教育)・軍隊、マスメディア(情報)、郵便局、交通網など、近代的制度など	
娯楽・遊戯	娯楽、遊戯、スポーツ	娯楽、遊戯 スポーツを範疇化	マイナー・サブシステムに近い漁についても、カテゴリーライズ
医療・衛生	医療、衛生	疾病、薬、予防、風呂など	

列として独立	屋号
	地名
	気象/災害
	人名

新たな「メディア」の展開と娯楽とが重なっているわけである。一つの記載事項のなかに二つ以上の分類項目が生じる事例が増加することで、分類項目の列自体の更新も必要になっていった。

2番目の大項目、「医療・衛生」には、文字どおり、病気や衛生に関わる一連の記事をカテゴリーライズしている。筆者自身の頭痛に歯痛、あるいは弟、知行氏の盲腸といった疾病に関わる事例が日記に記されていた。これらは、下位分類では「医療」に相当する。また、歯磨きや風呂、予防注射などは、「衛生」に関わる事例としてカテゴリーライズした。さらに、親族の怪我に際しての集団でのお籠りやカミサマ(民間宗教者)の祈祷も「伝統医療」として、この項目にも含み込んでいる。

## 分類項目の更新 2

そして、更新の最後段階が、(ver3.0)にあたる(表4)。ここでは、これまでと異なる点として、「大分類」の項目の増加と「列」の増加に加えて、大分類に複数の項目を記入する方針を変更したことである。結果的には二つのセルに分けていた大分類を一つに統一することにした。

ここで累積的に増加した大分類として、「教育・軍隊」、「情報・メディア」、「交通・移動」、「交流・交換」、「公共」、「出来事」という項目が再編された。初期・中期の段階で大分類の項目にあげ

表4 分類の最新設定

大分類	小分類	キーワード	各項目、備考
親族・同族	家族、親族、姻族、同族	家族、親族、屋号、地名の一部、地域の人間関係全般	"家族、親族、地域の人間関係地縁・血縁のうち、「地縁」に近い関係性を「同族」という語彙で併記し、下位で分節化。"
農・林業	稲作、畑作、林業、採集	農業、林業、その他の雑業	生業のなかで「農業、林業」に準じる作業、雑業一般
漁業	養殖漁業、イワシ漁、釣、その他の漁撈	海苔、カキ、カス、イワシ、ドウシバ、ウナギ、タコ釣り、あさりなど	生業のなかで「漁業」に関する作業
社会組織	講、村方、青年団、行政村	講、手伝い	
衣食住	衣料、食生活、住環境	儀礼食、モチ、コウセン、部屋名、屋敷地名、衣服、靴、雨具など	
年中行事	正月、盆、節句、生業儀礼、学校行事、祝祭日	正月、祭り、講、農耕儀礼、盆、近代の祝日、学芸会、運動会など	
通過儀礼	出産、婚姻、葬制、その他	婚姻、葬式、ほか	卒業、入学など近代制度も含む
信仰	寺院、神社、民俗信仰	元朝参り、寺参り、オシラサマ、クジヨセ、テンノウサマ、オヨウゴモリ	口承文芸も含む
交通・移動	交通、交通網、旅、移動	舟、便船、汽車、車、旅、湯治、出征	
交流・交換	商業、工業、職人、技能、売買、交換	商業、工業、職人、売買、交換	
教育・軍隊	学校活動・公民学校・学芸会、運動会	学校活動・公民学校・学芸会、運動会など 軍事関係・教練、徴兵、戦死など	「近代制度」から移行、下位分類には、そのまま学校関係と軍隊関係
情報・メディア	文字、印刷媒体、レコード、映像、郵便制度	情報、新聞、少年倶楽部、手紙、ハガキ、電信など	「近代制度」から移行
医療・衛生	疾病、予防、薬、民間医療、衛生、薬剤	疾病、薬、予防、民間医療、風呂など、農薬、消毒薬など	
娯楽・遊戯	娯楽、遊戯、スポーツ	囲碁、将棋、模型、タガ	娯楽全般を含み、メディア関係のものは、「情報・メディア」と併記
公共(労働・納金・法律)	共益、納金、負荷義務	様々な義務について道仕事、納税、寄付など、裁判など	近代制度から、税金、法律関係を移行。同時に村仕事や組合などの公共性をしめす話題と統合
出来事	事件、出来事	津波、水死体、狂い咲き	

ていた「近代」と「交通・商工業」は、ここではあえて消去している。

前者の「近代」のカテゴリーに入っていた学校行事や軍隊に関連する記述は、「教育・軍隊」にほぼ対応している。これは、より具体的な事例に準じた名称に変えておきたかったからである。また、中期段階で、「交通・情報」の中の小分類に組み込んだ「情報・メディア」も大分類として独立させた。「情報・メディア」は、近代の郵便制度によって浸透した手紙やハガキ、あるいは電信についての記録を範疇化していた。同時に娯楽でも紹介した『少年倶楽部』や新聞などの印刷媒体、あるいは蓄音機や活動写真といった電子メディアについての記録なども範疇化している。

「交通・情報」の残りの項目は、「交通・移動」というカテゴリーに分割することにした。「交通・移動」は、文字通り交通手段をまとめてカテゴライズしている。具体的には小々汐から対岸に移動する際に用いていた船、遠隔地への移動の際の鉄道や自動車などをカテゴライズした。船について

は日常生活の往来で頻繁に記載されており、それらが明治以前から、小々汐と他所を結ぶ主要な交通手段であったことをうかがわせる。それに対して鉄道や自動車は、いうまでもなく近代以降に整備されていった新たな交通手段である。このような手段と並行して、様々な目的を伴う移動についても目配せが必要であると考え、移動の項目を加えておいた。日記のなかには湯治の旅、軍への入隊、あるいは修学旅行といった様々な移動や旅の記録も記されているからである。

また、「交流・交換」は、「商工業」とは異なるベクトルの「交換」についても範疇化するため、このような名称を付与している。「商工業」では小々汐を訪れる職人や商人の事例を念頭に置いていた。しかし、小々汐には、業者が山の木を買いにくることもあるし、逆に小々汐からノリやイワシのカスなどの生産物を売りに行くこともあった。これらの相互的な売り買いと場合によっては貨幣を介さない取引なども考慮して、「交流・交換」という大分類を設けることにした。

付け加えておくと、「近代」を消去したことにはもう少し別の理由もあった。このカテゴリーによって、近代と前近代、あるいは民俗と非民俗を明確に線引きすることを避けたかったからである。実際、いくつかの大分類では、前近代的な制度やシステムと近代的なそれらとが、互いに重なり合って併存していることがわかる。そこで大分類では、日記が書かれた同時代において等しく享受され、生活に組み込まれていた生活様式をできるだけ広くみていくことを目指した。

例えば、尾形家の生業の主要な柱の一つは漁業であった。しかし、一口に漁業といっても、その内実は時代によって大きな異同がある。カツオ漁の餌や畑の肥料に用いた沿岸部のイワシ漁は、近世から盛んに行っていた伝統的な漁業形態である。それに加えて榮一日記が記された時代、かなりの手間と努力をかけていたのが、海苔の養殖であった。海苔の養殖が気仙沼にもたらされたのは近世末であり、小々汐でもそれほど間をおかずに始められたと考えられる。さらに海苔よりも新しい時期に開始されたと考えられるのが、カキの養殖だった。その試みが本格化するの、まさにこの日記が書かれる時期以後である。このように漁業という範疇のなかでも、前近代から近代にかけての生活の変化と異なる形態の並存をみることができるのである。

同様のことは、年中行事についても言える。オオイでは一年を通して様々な行事が、前近代から継承されてきた。他方で、明らかに明治以後に導入されたものとして学校の運動会や学芸会は、半ば地域の年中行事として定着していた感がある。さらに微妙な事例もある。例えば、日記のなかでかなりの頻度で登場する「金比羅様」の存在である。これは、小々汐の舟溜りの入り口付近にある小祠である。日記の中では、この「金比羅様」にオヨウゴモリを行ったり、オミキアゲを行ったりした様子が記されている。また、この金比羅様の祭りは旧の10月10日であった。

十一月二十日 雨 雨後晴 起=六時 寝=十一時

今日は金比羅様の祭典日だ。(十月十日)。

朝×より雨にて×山根の座敷にして居りし

にずん／＼と晴天になりたるとより(ぶだい)かけに出る。

終って晝すぎより神樂を開始したり。夜の十一時<sup>(ママ)</sup>しきまでにて終れり。

このように小祠ではあるけれど、祭り日も設定され、神樂まで登場する村の祭祀の中核的な場所



であった。しかし、実はこの金比羅様を勧請し、小祠を建立したのは1894（明治27）年、つまり、近代以後の事例に他ならないのである。しかもこの小祠を勧請したのはオオイを含めた20数軒の小々汐内の同族である。この時期、オオイでは家督を巡っての相続争いがあった。親族の争いは裁判に持ち込まれ、結果的に現当主の曾祖父にあたる忠七氏が家督を継承することになる。この時、忠七氏を支援した家が共同で勧請したのがこの金比羅様だった。そのため、村の中でもこの金比羅様の勧請に普請していない家があり、それ以後の祭りにも参加していない。その意味では金比羅様の小祠をめぐる年中行事や信仰にさえ、近代の諸制度が刻印されているとも言えるだろう。

以上のような点を踏まえると「近代」についての分類は、一旦カッコに括ることが妥当だと判断したのである。実際、民俗文化に位置づけうる項目のなかにも近代以後の諸制度が上書きされており、近代と前近代を明確に分けることはむづかしい。他方で近代的な諸活動、学校行事や地域の青年団の行事として始まった運動会や演芸会が地域のなかで慣習化し、年中行事化していく側面も指摘できる。このような特質は、データベースを解釈する者に対して開かれているべきであり、分類の段階で分節化するべきではないと考えた。

残りの、「公共」「出来事」についてまとめておきたい。「公共」には、より近代的な含意を示していることは確かである。具体的には行政単位であった鹿折村で構成していた道路組合での共同作業やそこへの寄付金があり、村の議員への立候補と選挙などが挙げられる。しかし、そこでも興味深かったのは、小々汐から立候補した議員が当選すると、オオイでは家を開放し、大振舞いを行った様子も示されていることである。翻って考えるならば民俗学が対象としていた宗教的、社会的な講組織にも同じような機能が備わっていたともいえる。問題はそこでの目的や制度的の布置、結集される集団のメンバーシップが異なっていたのである。

また、出来事には、その下位分類としてさらに「事件」と「出来事」にわけておいた。前者には、当初は、「その他」にカテゴリライズしていた津波の話や、村の海岸に水死体が漂着したエピソードをカテゴリライズしている。後者には、より日常的な出来事として家の桜の花が季節外れに咲いた話などを含み込んでおいた。

なお、この段階での「列」の本文以下では、「大分類」「小分類」「キーワード」「屋号」「人名」「地名」「天候」「備考」の計8列とした。この「大分類」「小分類」には複数の分類項目を入れてもよいこととした。また、本文に明記されていなくても、地名が具体的な人物をさしていると判断された場合には、地名にはそのまま漢字で表記を行い、人名にその地名に当たる人名を併記することにした。

以上を確認すると表5のようになる。当初、単なる剰余カテゴリーである「その他」をのぞいた10に分類していた大分類は16に増え、近代化の過程で地域社会や家、さらには個人を覆っていった種々の社会制度を捕

表5 分類枠の比較表

初期分類項目	最新分類項目
家族、親族	親族・同族
農業、林業他	生業1=農林業
漁業	生業2=漁業
社会組織	社会組織
衣食住	衣食住
年中行事	年中行事
通過儀礼	通過儀礼
民俗信仰	信仰
交通、商工業、地域外との関係	交通・移動 交流・交換
近代制度	教育・軍隊
	医療・衛生
	娯楽・遊戯
	情報・メディア
	公共(労働・納金・法律)
	出来事
その他	その他

---

捉することが可能になったと考えている。

## おわりに

本稿ではこれまで、「尾形栄一日記」のデジタルアーカイブ化の作業を通して、そこに記された生活の諸相を捉え直すために分類項目自体を更新し、多角的に更新する過程を説明してきた。

最初に確認しておきたいのは、作業の過程で分類が行われなかった多くの記事についても大分類、小分類での階層化が行われたことである。繰り返しになるが、書かれた内容を分類化できないということ自体が、過去の生活の多くの部分を見失わせていたことに他ならない。逆に多くの記事に分類項目を適用できれば、日記の参照頻度を高め、ひいてはその資料的価値を高める契機となりうる。また、新たに付与された項目は、近代史や地方史のほか、社会学や教育学的な観点からも参照可能な性格を持っている。その意味では資料の共有度も高め、他分野の関心にも開かれたデータベースになりうると考えられる。

では、研究分野自体にはどのような意義をもたらしうるだろうか。議論の目的で明示したように、ここで大分類として提示した項目は、民俗学の既存の外延を更新する可能性を有している。ただしこのような展開に向けては、次のような留保が必要となる。

まず、これらのデータを他の日記資料と照らし合わせつつ、その大小の分類項目についての更新を行う必要がある。日記というカテゴリーの資料にも時代や地域、あるいは書き手の意図によって大きな違いがあると考えられるからである。それらのデータをより多く動員することで、大分類と小分類の外延を拡張するとともに、分類項目の平準化を行う必要があるだろう。

次に既存の研究書や学会誌などにおける民俗文化の外延と比較し、その差異を比較検討する必要がある。本論でも、『民俗調査ハンドブック』や自治体史などについては、簡単な言及を行ったが、この試行的な分類項目を民俗学の外延として展開するために、より組織化された論集や報告書の章立て、目録などを参照しなければならない。教科書や全集本といった民俗学を体系的に論じた書籍類における分類枠とも、比較検証していかねばならないだろう。

また、各々の大分類における関係性についても再定義しなければならない。本稿が紹介したように初期設定の項目は、民俗学のオーソドックスの対立項によってカテゴライズされていた。伝統的な文化に対して近代以後の諸制度、あるいは村落内や親族内での関係性に対してその外部的な存在が指示対象となっていた。このような位置付けは、民俗学において「都市」がテーマとなったり、「過疎」や「観光」がテーマになったりした契機とも相似的であるとも言える。そのような関係性の是非も含めて、外延の更新を図る必要があるのである。

おそらくこの段階に至るならば、民俗学の内包、すなわち、民俗学の学問的な成立基盤を問い直す必要にも迫られることになるだろう。民俗学の立場から検証し、解釈し、提示するものが、どのようなパースペクティブのもとに見出されたものであるかを、明示しなければならないのである。

## 註

(1)——すべての研究資料は、一定の手続きを経て「読みうるもの」とする一般化、汎用化の過程と、そこで「読み取られたこと」の意味を検証し、解釈する専門化、固有化の過程がある。本論で論じるのは、このような一般化と専門化に付帯する学問的なバイアスである。もっとも一般化の過程において、このようなバイアスはほとんど意識されていない。しかし、少し注意するならば、そのようなことは不可能であることがわかる。そもそも、そこで検証や作業の対象となる資料を選んだのはなぜだろうか。場合によっては資料の一部を選定するのはなぜだろうか。そこであらかじめ研究者の視点(とりわけ各々の学問的な)による選別と排除が行われていることは間違いない。

(2)——日本民俗学における日記研究の系譜とそこで生じた問題点については、「民俗学における日記研究の展開とその可能性」(川村清志、小池淳一共著)として、本特集号に掲載している。

(3)——ここで想定する作業は、異なる時代、異なる地域、異なる視点と記述の方式による日記資料のなかから、民俗行事を抽出し、その異動についての検証や比較研究を行うというような試みである。これまで市史の編纂などの過程で特定地域の複数の日記資料や時代を異にする

資料の検証は行われてきた。しかし、より広範囲で時代幅も大きな多くの資料を並列化し、特定の記述内容を検証を可能にする作業は、ほとんど行われていない。

(4)——この昭和の大津波後に東北各地の沿岸部には津波記念碑が建てられる。この小々汐を含めた四カ浜にも6基の碑が建立されているが、そこに記された碑文は、「大地震、どんと沖鳴りそれ津浪」、あるいは「大地震それ来たぞ大津浪」である。地震と津波の因果関係を明示し、津波に対する備えを呼びかける内容になっている。

(5)——もっとも、1949(昭和24)年に発刊された『鹿折村志』[鹿折村誌編纂委員会編 1949]によると、沿岸の主要な魚介類として、イワシ、カレイ、ボラ、マス、ワカサギ、ウナギ、ハモ、メロウド(コウナゴ)、オオガイ、タナゴ、イカの名が挙がっており、オオガイも主要な11種の魚種に含まれている。

(6)——ここでバージョンの記録のルールは次のようなものである。バージョンのなかで小項目が変更、添加、削除が行われた場合には、0.01の変化とし、大項目内の項目変更、添加、削除ならびに列の変更、添加、削除が起きた場合には、0.1バージョンずつ更新していった。しかし、それらをまとめて変更した場合に、変更点のトータルが1を超えた場合には、1.00の更新としている。

## 参考文献

- 小川直之 1990「神奈川県内の日記史料の所在」『農耕習俗と農具 昼間家日記を中心に』神奈川県立博物館, pp.148-156  
 上野和男 福田アジオ 高桑守史 宮田登編 1987『新版 民俗調査ハンドブック』弘文堂  
 川喜田二郎 1967『発想法——創造性開発のために』中央公論社  
 川島秀一 2014「追尾士の捕鯨記録—北海道網走市, 昭和46~47年の小型沿岸捕鯨」『国立歴史民俗博物館研究報告』181, pp.133-146  
 気仙沼市史編さん委員会編 1994『気仙沼市史 VII 民俗宗教編』宮城県気仙沼市史編さん委員会  
 国立歴史民俗博物館編 2013『東日本大震災と気仙沼の生活文化: 図録と活動報告』国立歴史民俗博物館  
 近藤敏夫 2005「質的研究における分析と解釈(1) —日記のデータベース化とコーディング—」『社会学部論集』41, pp.89-103  
 近藤敏夫 2006「質的研究における分析と解釈(2) 日記の書き手からみた社会的世界」『社会学部論集』42, pp.77-94  
 鹿折村誌編纂委員会編 1949『鹿折村志』宮城県本吉郡鹿折村  
 永島政彦 1996「農業日記にみる畑作農家の生業」『群馬歴史民俗』17  
 永島政彦 1997「『笹田武男日記』にみる山村住民の生業—昭和五十五年・利根村日向南郷」『ぐんま史料研究』9, pp.23-49  
 萩原ちとせ 1989「近世日記にみる三浦半島の民俗—相州三浦郡大田和村—」『民俗(相模民)』131, pp.3-7  
 福田アジオ 2016『歴史と日本民俗学: 課題と方法』吉川弘文館  
 安室 知 1992「『星野日記』にみる農民漁撈—明治19年~明治41年—」『横須賀市博物館研究報告(人文科学)』37, pp.55-70  
 安室 知 1995「『昼間日記』にみる農民漁撈—明治43年~大正7年—」『横須賀市博物館研究報告(人文科学)』40, pp.19-33  
 安室 知 2012『日本民俗生業論』慶友社  
 山田雄二 1996「明治・大正期の世間づき合い—厚木市金田の『星野日記』に記された不祝儀のつき合い—」『民俗(相

---

模民)』156. pp.5-8  
湯川洋司 1997 『山の民俗誌』 吉川弘文館

(国立歴史民俗博物館研究部)

(2017年12月18日受付, 2018年8月3日審査終了)



---

## **Attempts at Digitally Archiving Folk Culture Resources : To Make Use of Cultural Resources and Update the Field Science**

KAWAMURA Kiyoshi

This report discusses issues which arose during the procedure of digitally archiving diary resources and the potentials for the extension and updating of the denotation of folkloristics which were fostered. The ultimate aim of this report can be summarized into two broad goals. The first is to create a structure to increase the degree of sharing of resources handled by a specific field of scholarship (folkloristics, in this case) by making it available for common use and thereby usable by folkloristic researchers with differing interests as well as the general public interested in primary sources. The second is to reconsider the denotation and connotation of existing scholarship with a thorough investigation and analysis of primary sources in an attempt to upgrade this field of study.

The resource considered here is a diary resource from the early years of Showa (which started in 1926) which was affected by the Great East Japan Earthquake Disaster. This resource offers a glimpse into the social conditions and cultural background of the day which is beyond the scope of folkloristics. Through the exceptionally plain work of extracting the varied information indicated by the resource as completely as possible, classifying them, and digitally archiving them, the writer would like to retrace clues urging the reorganization of the area of research mentioned above.

To this end, this report first provides an overview of results of research surrounding diary and written resources in folkloristics and similar areas and sets the theme for research. Next, it briefly describes the diary resource which is the subject of detailed analysis in this report. Then, it investigates the issues which arose during the process of digitizing and creating a database of the resource and the classification framework which became apparent in dealing with those issues. Changes to the classification framework were cumulative as digitization of the diary progressed. The changes which became necessary while working reciprocally with specific instances are identified. The classification categories extracted by this are compared with existing denotation of folkloristics, and discrepancies are investigated. Through these steps, the classification framework which has been common in folkloristics was critically relativized, and categories necessary to grasp the everyday culture of people including the pervasion of various systems related to modernization, new media networks, and transportation networks were identified.

Key words : digital archive, diary, KJ method, folk denotation, modernization, classification

---